チェスター伯ヒューとアングロ＝ノルマン王国

中村敦子

【要約】アングロ＝ノルマン王国における、ノルマン征服世代の有力貴族であったチェスター伯ヒューは、イングランドとノルマンディーを行き来し、ル＝パトゥーレルがイングランドとノルマンディーの一体性を主張する根拠のひとつとしたクロス・チャネル・タイプの貴族の一人と考えられている。本稿では、当時の政治状況の変遷を背景に、彼の動向をできるかぎり再構成することによってその行動指針をとらえようと試みた。すると、イングランドとノルマンディーという地域的枠組みと同時に、ウェールズ辺境領域のチェシャーを中心とする、征服により獲得された所領と、中西部ノルマンディーにひろがっていた彼の父から継承した所領の双方の維持という、彼自身の所領により構成される地域的枠組みが、重層的にヒューの行動を規定していたことが理解されるのである。

史林　八二巻六号　一九九九年一一月

はじめに

ノルマン・コンクエストがその後の国家としてのイングランドの方向に決定的な影響を与えた事件であったということは改めて言うまでもない。その結果、ノルマン・コンクエストの意義については、中世イギリス史研究者が中心になって、主に征服の影響としてのイングランドの制度的成長について研究が重ねられてきた。そのため、ノルマン・コンクエストにより成立したアングロ＝ノルマン王国は、イングランドにのみ視点をおいて理解されることが多かったといえる。しかし、イングランドとノルマンディーの一体性を主張するJ・ル＝パトゥーレルの「ノルマン帝国」論により、アングロ＝

ノルマン王国研究は英仏海峡の両側に目を配るという高次の視角を得ることになった。C・W・ホリスターも支持したこの議論については、発表以降二〇年以上を経るなか、さまざまな批判と展開が重ねられてきたが、我々は未だそれを乗り越える全体的な見通しを得ているわけではない。[1] だが、このイングランドとノルマンディーの一体性の主張により、クロス・チャネル・リレイションシップの重要性という新しい視点がひらかれたことは、その後のアングロ＝ノルマン時代研究の方向に大きく影響することになった。[2]

ノルマン・コンクェストに関し、これまで大きな関心をひいてきた問題点のひとつは、征服の結果、イングランドの支配層が大陸出身の人々に入れ替わったということであった。この支配層の交替の意味は、封建制の導入に関する議論にみられるように、主に国制史的側面から研究されてきた。だが、イングランドとノルマンディーの一体性を主張したル＝パトゥーレルが、その根拠の一つとして強調した「イングランドとノルマンディーの貴族の均質性」という議論は、その後の社会史的アプローチの隆盛にも影響され、王国論、制度史的関心をこえてアングロ＝ノルマン貴族社会についての研究を新たに活性化させることになる。その後さらに、一一・一二世紀のアングロ＝ノルマン貴族の親族関係、社会的流動性という視角における行政貴族の台頭などが注目され、[3] 現在では王国の統合の問題はやや背景に退いた観がある。だが、ル＝パトゥーレルの提起した問題は、なによりも基本的に人的結合により成り立つ中世国家であるアングロ＝ノルマン王国を理解するうえで、改めて注目する必要があるように思われる。

ここで、「イングランドとノルマンディーの貴族の均質性」をもたらした『クロス・チャネル・エステイト』を持つ貴族たち」というル＝パトゥーレルの見解を確認してみよう。[4] 彼は、征服により新たにイングランドの所領を獲得した貴族たちが、故郷ノルマンディーの所領をも同時に維持し続けていたこと、そして両地を行き来していたことを重要視した。しかも、その傾向は最上層貴族より下のレベルにまで浸透していたのである。そして、一時的に分割されることがあったにせよ、征服以降、世代を経ても海峡を挟んで存在する所領を維持し続ける傾向は続いた。よって、所領の安全のために

イングランドとノルマンディーの地の双方で同一の君主を求め、両地の一体性を志向する貴族たちが双方の地に共通の貴族層として存在し続け、彼らの存在が双方の地の統合の基盤となっていたと考えるのである。[5]

これを受けてE・J・R・ボストンは、ヘンリ一世までのアングロ＝ノルマン貴族たちの所領保有の変遷を検討し、一一三五年までは、所領保有、そして家系としてのイングランドとノルマンディーの分化はそれほど進まなかったと理解して、大枠でル＝パトゥーレルの見解を支持する結論を出している。[6] 一方、J・A・グリーンはクロス・チャネル・バロンは少数派であったと考え、さらに、ノルマンディーの辺境領域の貴族たちが、彼らの所領の存在する地域的利害関心にのみに沿って行動していたことを指摘して、クロス・チャネル・バロンに主眼をおいたル＝パトゥーレルのアングロ＝ノルマン貴族像を批判した。[7] D・ベイツも、征服後もイングランドに所領を得ることのなかった貴族たちの存在の重要性を主張する。[8] また、D・クラウチは、ヘンリ一世時代においてもクロス・チャネル・バロンたちが存在し続けたことを確認するが、世代が進み、大陸から渡ってきた彼らがイングランドの所領に根付くにつれ、所領を維持してゆくための当該地域におけるローカルな事情が貴族たちの行動を規定していくことを重視する。クラウチはさらに、下の階層では急速に在地化が進んでいたと考えるのである。そして、グリーンが指摘したようなノルマンディーの辺境貴族たちの行動にみられる地域性とあわせ、イングランドとノルマンディーの統合に利害関心をもたない貴族たちや在地化した人々の存在から、双方の地に利害をもち一人の君主による統合を支持していたのはわずかの貴族たちにすぎなかったと結論した。[9] 筆者も旧稿でル＝パトゥーレルの主張した貴族の「均質性」に対し、多様な貴族層の存在を指摘した。[10]

以上のように、ル＝パトゥーレルによるアングロ＝ノルマン王国の貴族層理解に対し、すでにいくつかの検討がなされてきた。だが、これまでの批判は、ル＝パトゥーレルのいう「クロス・チャネル」タイプの貴族たちの存在は認めつつ、そのうえで、「クロス・チャネル」タイプ以外の貴族たちの存在を重視することに主眼があったように思われる。つまり、「クロス・チャネル」であることの内容そのものについては問題にしていない。しかし、そもそも「クロス・チャネル」

タイプであることとは、どのような内容を含んでいたのだろうか。ル＝パトゥーレルの主張の最大の根拠でもあった、初めて海峡を挟んで所領を保有することになった征服世代の貴族たちは、どのように「クロス・チャネル」であることができたのか。そしてその動向はどのように王国に影響したのだろうか。

本稿では以上の問題設定にたって、征服世代の大貴族であるチェスター伯ヒューをとりあげ、征服第一世代の「クロス・チャネル・バロン」がどのように動いたか、そして「クロス・チャネル・バロン」であることは実際にはいかなる内容をもっていたのか、を検討したい。[11]

チェスター伯ヒュー（ユーグ・ダヴランシュ）は、ウィリアム征服王の直属封臣であり、アングロ＝ノルマン王国の有力貴族である。イングランドとノルマンディーの双方に所領を持っていたこと、そして、イングランド、ノルマンディーの双方で王の証書に名をつらねていること、つまり海峡の両側を頻繁に行き来していたと考えられていることにより、彼はクロス・チャネル・タイプの貴族の一人と理解されている。[12]このヒューの活躍ぶりについて、オルデリクス・ヴィタリスは「彼は人生とその栄華をこよなく愛した」と述べ、修道士らしく多少の皮肉を込めながらも、ヒューを生き生きと描写した。[13]中世のチェスター伯、チェシャーについては、これまでチェシャー州のカウンティ・パラタイン（伯領州）性をどのように理解するかが検討され、[14]そしてスティーヴン王の内乱時代におけるチェスター伯ラヌルフの活動がJ・H・ラウンド以来注目を浴びてきた。[15]それらに比べ、ヒューの活動は、多くのアングロ＝ノルマン史研究において言及されつつも、当時の有力貴族の一例として紹介されるのみであった。もっとも詳細にヒューをとりあげたC・P・ルイスの研究も、ウェールズ境界領域におけるノルマン貴族の一人としてその所領形成の過程をたどることに主眼がある。[16]

以下、まずヒューの経歴をさぐり、当時のアングロ＝ノルマン社会の変遷のなかに彼の行動を位置づけることを試みる。そして、その政治的関心を焦点とし、彼と君主たちとの関係を軸に、ヒューの志向と王国全体の動きとの関連をたどる。

征服第一世代のトップ・クラスの有力貴族の具体的な動向と、アングロ＝ノルマン王国の枠組みはどのような関係にあるのだろうか。

① J. Le Patourel, *The Norman Empire* (Oxford, 1976). ル＝パトゥーレルの見解に対する総括的批判としては、D. Bates, 'Normandy and England after 1066', *English Historical Review* (*E. H. R.* と略記), 104 (1989), pp. 851-80 ; J. A. Green, 'Unity and Disunity in the Anglo-Norman State', *The Bulletin of the Institute of Historical Research* (*B. I. H. R.* と略記), 62 (1989), pp. 114-34. ル＝パトゥーレルの議論とその批判については、有光秀行「『アングロ・ノルマン王国』論のゆくえ」イギリス中世史研究会編『中世イングランドの社会と国家』山川出版社、一九九四年、八九―一一四頁にまとめられている。ノルマン・コンクェスト研究史全体の流れについては、M. Chibnall, *The Debate on the Norman Conquest* (Manchester, 1999).

② たとえば Anglo-Norman Studies 誌の創刊、D. Bates, A. Curry ed., *England and Normandy in the Middle Ages* (London, 1994) などにみられる英仏史研究者相互の交流の広がりがその方向を示している。

③ たとえば、C. W. Hollister, 'Magnates and "Curiales" in Early Norman England' (1973), pp. 97-115 ; id., 'Henry I and the Anglo-Norman Magnates' (1980), pp. 171-189, in id., *Monarchy, Magnates and Institutions in the Anglo-Norman World* (London, 1986) ; C. A. Newman, *The Anglo-Norman Nobility in the Reign of Henry I The Second Generation* (Philadelphia, 1988) ; D. Crouch, *The Image of Aristocracy in Britain 1000-1300* (London, 1992) ; J. A. Green, *The Aristocracy of Norman England* (Cambridge, 1997) ; K. S. B. Keats-Rohan ed., *Family Trees and the Roots of Politics The prosopography of Britain and France from the tenth to the twelfth century* (Woodbridge, 1997) など。

④ 拙稿「アングロ＝ノルマン王国における貴族」『史林』、七八巻、一九九五年、一七九―八五頁で、アングロ＝ノルマン王国貴族層の研究史を概観した。本稿の立論上、重複がみられることをお断りしておきたい。

⑤ Le Patourel, 'Normandy and England 1066-1144' (1970), in id., *Feudal Empires : Norman and Plantagenet* (London, 1984) VII ; id., *The Norman Empire*, pp. 190ff.

⑥ E. J. R. Boston, *The Territorial Interests of the Anglo-Norman Aristocracy, c. 1086-c. 1135* (Unpublished Ph. D. thesis, Cambridge, 1979).

⑦ Green, 'Unity and Disunity', pp. 128-33 ; id., 'King Henry I and the Aristocracy of Normandy', in *La "France anglaise" au moyen âge* (Paris, 1988), pp. 161-73.

⑧ Bates, 'Normandy and England after 1066', pp. 854-5.

⑨ D. Crouch, 'Normans and Anglo-Normans : A Divided Aristocracy?', in Bates, Curry ed., *England and Normandy in the Middle Ages*, pp. 51-67.

⑩ 拙稿「アングロ＝ノルマン王国における貴族」。

⑪ イングランドとノルマンディーの双方におけるアングロ＝ノルマン貴族の動向については、主に一二世紀を対象としていくつかの研究があるが、王国全体の流れに位置づけることより、貴族の個々の動きと

所領保有の変遷をたどることに重点がある。D. Crouch, *The Beaumont Twins : The Roots and Branches of Power in the Twelfth Century* (Cambridge, 1986) ; W. E. Wightman, *The Lacy Family in England and Normandy 1066-1194* (Oxford, 1966) ; L. Musset, 'Aux origines d'une classe dirigeante : Les Tosnys, grands barons normands du Xe au XIIIe siècles', *Francia*, 5 (1977), pp. 45-80.

⑫ Le Patourel, *The Norman Empire*, pp. 190ff.

⑬ Orderic Vitalis, *The Ecclesiastical History*, ed. tr. M. Chibnall, 6 vols. (Oxford, 1969-80) (O. V. と略記) II, pp. 260-3. オルデリクスは、ヒューの家臣であったロバート・オブ・リズランの兄弟からヒューについて詳細な情報を得ることができたと考えられている。

⑭ G. Barraclough, *The Earldom and County Palatine of Chester* (Oxford, 1953).

⑮ J. H. Round, 'King Stephen and the Earl of Chester', *E. H. R.*, 10 (1895), pp. 87-91 ; H. A. Cronne, 'Ranulf de Gernons, Earl of Chester', *Transactions of the Royal Historical Society* (*T. R. H. S.* と略記), 4th ser. 20 (1937), pp. 103-34 ; E. King ed., *The Anarchy of King Stephen's Reign* (Oxford, 1994). チェシャーについては、バラクラフによるチェスター伯家の証書集の編纂に続いて研究論文集も刊行され、チェシャー研究を進展させることになった。G. Barraclough ed., *The Charters of the Anglo-Norman Earls of Chester, c. 1071-1237, The Record Society of Lancashire and Cheshire*, 126 (1988) (*C. E. C.* と略記) ; A. T. Thacker ed., *The Earldom of Chester and its Charters : a tribute to Geoffrey Barraclough, Journal of the Chester Archaeological Society*, 71 (Chester, 1991).

⑯ C. P. Lewis, *English and Norman government and lordship in the Welsh borders, 1039-1087*, (Unpublished Ph.D. thesis, Oxford, 1985) ; id., 'The Formation of the Honor of Chester, 1066-1100', in Thacker ed., *The Earldom of Chester and its Charters*, pp. 37-68 ; id., 'The Early Earls of Norman England', *Anglo-Norman Studies*, 13 (1991), pp. 207-23.

一　ヒューの経歴とアングロ＝ノルマン王国の展開

一・一　征服王時代

筆者は別稿で一一世紀前半のノルマンディーにおけるヒューの家系について検討し、[1] ヒューの父であるリシャール・ゴツとノルマンディー公ギョーム二世（ウィリアム征服王）との間に、アヴランシュ副伯としての地位を媒介に一種の協力関係が存在したこと、ゴツ家の勢力圏が中西部ノルマンディーにあったことを指摘した。ノルマン・コンクエスト後、ヒューはウィリアム征服王の証書に頻繁に現れはじめ、続いて征服王の息子でイングランド王となるウィリアム二世（ルー

フス）時代にも比較的よく登場している。一一〇一年夏までの長い経歴、そして征服以前の情報のなさからも[2]、征服当時ヒューはごく若かったと考えてよい[3]。では、一挙に彼が表舞台へと登場する機会となったノルマン・コンクェストにおいて、ヒューはどのような役割を果たしたのか。

ヒューも父リシャールもヘイスティングズの戦いに参加したかどうかは定かではない[4]。しかし、征服に際し船舶や人材を提供した当時の有力貴族たちの名を記録するシップ・リストと呼ばれる史料には、征服王の異父兄弟たちであるバイユー司教オドとモルタン伯ロバート、そして王に近しい有力貴族たちであるロジャー・ド・モンゴメリー、ロジャー・ド・ボーモン、ウィリアム・フィッツオズバーンらの名とともに「チェスター伯ヒュー」の名が見られ、一方父リシャールの名はない[5]。リシャールは征服の頃に証書に副署しており[6]、以降も王の証書に登場していることから、王と疎遠になっていたわけではないことがわかる。つまり、ヒューが征服後チェスター伯となり、広大な所領をイングランドに得たこと、そしてリシャールが八〇年代初期まで政治的に現役であったにもかかわらず、イングランドでの活動がみられないことから[7]、ゴツ家はこの段階でいったんノルマンディーとイングランドに分化したともいえるのである。

ロジャー・ド・モンゴメリーはウィリアム・フィッツオズバーンとともに、一一世紀半ばのノルマンディーで、ギョーム二世公がその権威を確立し始めた頃からの支持者である。また、ロジャー・ド・ボーモンとロジャー・ド・モンゴメリーはともにノルマンディーの副伯であり、征服以降もアングロ＝ノルマン王国における有力者であり続けた。これらの年かさの有力貴族たちは、征服によってノルマンディーの所領に加え、イングランドの所領を得て「クロス・チャネル・エステイト」を保有することになるが、若いヒューは、父の維持するノルマンディーの所領から離れてイングランドで勢力を確立し、そこで自立することを期待されたのであろう[8]。

ヒューは一〇七一年、あるいはそれ以前、征服王によりチェシャーを任された[9]。ウェールズ境界の所領という戦略的重要性にもかかわらず、若いヒューがその任に耐えうるとみなされたのである。彼はそれ以前タトベリー城（スタフォード

シャー）を得ていたが、[10] これは征服王が南西イングランドを征し、ウェールズ勢力と協同してのエドウィン、モーカー両伯による一〇六八年から始まる反乱を押さえつつ、北方の制圧に向かう途中であったと考えられる。[11] ヒューは、この時の活躍により王に認められたのであろう。ウェールズは常にアングロ＝サクソン人側と協力してノルマン勢力に対抗する可能性を持つため、ウェールズ辺境防衛は王国の安全維持に重要な意味を持っていた。征服王は、ウェールズ辺境領をまとまった大所領として信頼できる有力貴族に任せたが、チェシャーもそのひとつであった。[12] この後、ヒューは伯のタイトルをともなって史料に登場することになる。

一〇七〇年代のウィリアム征服王の証書へのヒューの登場は比較的少ない。父リシャールは一〇七四年の、有力貴族が多数参加したルーアンでの大集会に出席したようだが、そこにヒューの名はみえない。[13] 一方、八〇年頃にはヒューは北ウェールズ奥深くまで侵攻することが可能であった。[14] このことから、この頃ヒューはチェスター伯として、ウェールズ辺境にある新たに得た自己の所領を維持拡大する作業に集中していたと思われる。この時期ヒューの活動は主にイングランド、とくにウェールズへの対応に集中し、一方父リシャールがノルマンディーにおける王＝公の宮廷への出席者であったといえよう。

ヒューが父を継いでアヴランシュ副伯となるのは一〇八〇～一年頃である。[15] 七九年のルーアンでの集会の出席者中には、シュルーズベリー伯ロジャー（ロジャー・ド・モンゴメリー）の名に並んで、父リシャールではなく、ヒューの名がみられる。これは征服王が貴族たちと王の長男ロベールとの争いについての対応策を議論したものであった。[16] 八〇年以降、征服王の証書に彼の名が多く登場し、ヒューが征服王のもとの有力貴族たちとともに、重要な集会によく出席していたことがわかる。[17] この時期の征服王の宮廷への出席の増加、なかでもノルマンディーでの証書への登場が増加する理由のひとつとして、父の副伯継承を考えることができるだろう。チェシャー防衛とウェールズ政策に集中していたヒューは、海峡を越えてその関心と基盤を広げることになった。つまりヒューは父を継承してはじめて厳密に「クロス・チャネル・バロン」

の定義をみたすことになったのである。

一〇八七年ウィリアム王の死により、長男のロベールはノルマンディー公位を、その弟ウィリアム・ルーフスがイングランド王位を継ぐ。では征服王の死の後のヒューの活動をたどってみよう。

① 拙稿「一一世紀前半のノルマンディー公と副伯ゴッ家」（「副伯ゴッ家」と略記）『西洋史学』、一九〇号、二一―三九頁、一九九八年。

② M. Fauroux ed., *Recueil des actes des ducs de Normandie (911-1066)*, *Mémoires de la Société des Antiquaires de Normandie*, 36 (Caen, 1961) にはいくつかの"Hugo"がみられるが、このヒューかどうか確認することはできない。

③ 拙稿「副伯ゴッ家」二八―九頁。

④ D. C. Douglas, 'Companions of the Conqueror', *History*, 28 (1943), pp. 129-47, p. 146, n. 4. また、オルデリクスによる「若い騎士ロバート・オブ・リズランとヒュー・ダヴランシュはヘイスティングズの戦いの後イングランドへ渡った」という叙述は、ヒューは戦いの後初めてイングランドへ渡ったことを示唆する（O. V., IV, pp. 138-9）。

⑤ 征服後数年以内に制作されたと考えられるこのシップ・リストに関しては、E. M. C. van Houts, 'The Ship List of William the Conqueror', *Anglo-Norman Studies*, 10 (1988), pp. 159-83 ; C. W. Hollister, 'The Greater Domesday Tenants-in-Chief', in J. C. Holt ed., *Domesday Studies*, (Woodbridge, 1987), pp. 219-48.

⑥ L. Musset ed., *Les actes de Guillaume le Conquérant et de la Reine Mathilde pour les abbayes caennaises*, *Mémoires de la Société des Antiquaires de Normandie*, 37 (Caen, 1967) (*Abbayes Caennaises* と略記), no. 2 (1066, Caen).

⑦ 彼の名はイングランドで承認されたと考えられる証書にはみられない。

⑧ 拙稿「副伯ゴッ家」三六―七頁。

⑨ O. V., II, pp. 260-1, n. 4, 5, IV, pp. 138-9.

⑩ O. V., II, pp. 264-5.

⑪ Lewis, 'Formation', p. 41.

⑫ チェシャーに関しては、その諸特権が伯の手に集中していたことが後の「パラタイン」根拠のひとつとして注目されてきた（Barraclough, *The Earldom and County Palatine of Chester*, pp. 16-27）。ウェールズ辺境への定住の概要については、Green, *The Aristocracy of Norman England*, pp. 68-76 ; B. Golding, *Conquest and Colonisation : The Normans in Britain 1066-1100* (London, 1994), pp. 49-54. など。

⑬ D. Bates ed., *Regesta Regum Anglo-Normannorum : The Acta of William I (1066-1087)* (Oxford, 1998) (*Regesta* と略記) nos. 26 (1074), 27 (1074).

⑭ A. Jones ed. tr., *The History of Gruffydd ap Cynan*, (Manchester, 1910), pp. 122-5 (*History of G. ap C.* と略記) ; J. E. Lloyd, *A History of Wales*, 2 vols. (London, 1911, 1948), II, p. 395 ; T. Jones ed. tr., *Brenhinedd y Saesson or The Kings of the Saxons*, (Cardiff 1971), p. 81 (1079-1081) (*Brenhinedd* と略記).

⑮ Lewis, 'Formation', p. 40 ; van Houts, 'Ship List', p. 167. また、拙稿「副伯ゴッ家」二九頁。

⑯ O. V., III, pp. 108-13. 征服王とロベールの争いについては、C. W. David, *Robert Curthose* (Cambridge, 1920), pp. 24-36.

⑰ Bates, *Regesta*, no. 39 (1081, England); no. 255 (1081, England); no. 206 (c. 1070-83 ? c. 1081); no. 264 (1082, Normandy); no. 60 (1082, England); no. 266II (1080, Normandy); no. 267II (1080, Normandy); no. 242 (1086-7, Normandy); no. 279 (1083, Normandy); no. 48 (1079-82 ? 80-82, 79-87 ?); no. 59 (1082); no. 49 (1081-82 ?, 81-87); no. 50 (1081-82); no. 53 (1080/1-83); no. 54 (1081-87); no. 208 (c. 1070-c. 1087).

一・二　ウィリアム・ルーフスの時代とヒュー

一〇八八年、ルーフスのイングランド王位継承にたいし、バイユー司教オド率いる大反乱がおこる。モルタン伯ロバート、クタンス司教ジョフロワ、ロジャー・ド・モンゴメリーなど有力貴族の多くが参加したにもかかわらず、ヒューはルーフスを支持した少数の貴族の一人であった。[1] ルーフスの宮廷におけるヒューについてのガイマールの生き生きとした描写や、[2] 王の証書にも登場することからも、[3] ヒューがルーフスを支持していたことが確認できる。

反乱を制圧してから、ルーフスは兄ロベールからノルマンディーを奪う戦略を繰り返すこととなった。九一年にはルーフスは北部ノルマンディーへ渡り勢力確立をめざし、ヒューもその遠征に加わっている。[4]

征服王の末子ヘンリも兄弟間の争いに積極的に参加した。ヘンリは父の死後コタンタン半島地域をロベールから得るが、[5] この地域にはヒューが父リシャールから継承した領域が含まれているのである。[6] 九一年にルーフスがロベールと和を結んだ後、兄二人に攻撃されたヘンリはモン・サン・ミシェルに立てこもることになったが、その後、ヒューはヘンリから忠誠の礼としてサン・ジャム・ド・ブヴロンを得ている。[7] ここから、兄弟間の争いの間、ヒューがヘンリとの協力関係を維持していたことが推測される。

一〇九四年にはウェールズでその後数年にわたる反乱がおこり、[8] ヒューは何らかの対応を迫られたと考えられる。また同年ルーフスの命により、ヘンリとヒューは行動をともにしている。[9] 九五年にはノーサンバランド伯ロバート・オブ・

モーブレーによる反乱がおこったが、このときもヒューはルーフスを支持したようである。[10] 九六年にはノルマンディー公ロベールが第一回十字軍に参加するため、多額の金銭と引き替えにノルマンディーをルーフスに預け、ここにルーフスはアングロ＝ノルマン王国を再建することとなった。

続いてウィリアム・ルーフス治世の後半、一〇九六年以降においてもヒューは活躍を続けている。ルーフスはノルマンディーを得て後もさらなる拡大政策をとるが、その一環である九七年のヴェクサン遠征にヒューも参加しているのである。[11] また同年ルーフスはウェールズ遠征も試みており、[12] ヒューはロジャー・ド・モンゴメリーの息子でシュルーズベリー伯をついでいたヒューと戦役に参加した。

ルーフスの治世は、一一〇〇年に彼が狩猟中に亡くなったことにより突然終わり、征服王の末子ヘンリが即座にイングランド王位を奪った。ヘンリの即位に対しては、十字軍から帰国したロベールを支持する貴族たちの反抗があったが、このときにヒューはヘンリを支持していたのである。[13] しかし、彼はヘンリの治世が始まった直後一一〇一年に亡くなった。[14] 彼の死後、幼い息子リチャードが父ヒューを継承していく。

以上、チェスター伯ヒューの経歴を再構成してきた。ここからいくつかのことが確認できる。まず、征服時ゴツ家がイングランドのヒューとノルマンディーの父リシャール、と一種の分化を示した。それはリシャールがイングランドの証書に副署していないこと、そしてヒューがノルマンディーでの証書に登場しないことから確認できる。このことは、一〇七一年にチェスター伯となったヒューが、七〇年代ウェールズ対策に専心することができた状況を裏から支えることにもなっているといえる。だが八〇年頃、ヒューは父の副伯を継ぎ、西部ノルマンディーに勢力基盤を拡大することになった。ヒューは、ようやくここでル＝パトゥーレルのいう「クロス・チャネル・バロン」の一員となったのである。ルーフス時代、ヒューはトップ・クラスの貴族として王の宮廷で活躍する。また彼はウェールズ政策をさらに積極的に押し進めてお

り、同時にその政治的関心に、くンリとの関係が入ってくることになった。

次に具体的な彼の政治的関心の焦点、つまり彼のウェールズ政策、そして、彼の主君となるウィリアム征服王の息子たちとの関係について検討してみたい。

① ヒューがルーフスを支持したことは、オルデリクスの記述に加え、一〇八八年のルーフスの証書にヒューが副署していることからも確認できる。O. V., IV, pp. 128-9 ; H. W. C. Davis ed., *Regesta Regum Anglo-Normannorum, I. 1066-1100* (Oxford, 1913) (*R. R. A. N.* と略記), no. 301 (1088).

② Maistre Geffrei Gaimar, *Lestoire des Engles,* ed. tr. T. D. Hardy, C. T. Martin, 2 vols. (Rolls Series, 1888, 1889) (R. S. と略記), lines 5860-6076.

③ *R. R. A. N.,* I, nos. 301, 317a, 318, 319 (?), 320, 325, 328, 397.

④ F. Barlow, *William Rufus* (London, 1983), p. 278 ; C. Johnson, H. A. Cronne ed., *Regesta Regum Anglo-Normannorum, II. 1100-1135* (Oxford, 1956) no. 317a (1091). ルーフスにノルマンディーにおいてかなりの勢力伸張をもたらした、いわゆる「ルーアンの協約」はこの年にとりきめられた (Barlow, *William Rufus,* pp. 281ff.).

⑤ *The Gesta Normannorum Ducum of William of Jumièges, Orderic Vitalis, and Robert of Torigni,* ed. tr. E. M. C. van Houts, 2 vols. (Oxford, 1992, 1995) (*G. N. D.* と略記), II, pp. 204-5 ; O. V., IV, pp. 120-1, 220-1.

⑥ O. V., IV, pp. 120-1.

⑦ *G. N. D.,* II, pp. 208-9. Saint-James-de-Beuvron (Manche, cant. Saint-James).

⑧ *The Anglo-Saxon Chronicle,* ed. tr. D. Whitelock, D. C. Douglas, S. I. Tucker (London, 1961) (*A. S. C.* と略記), 1094, 1095, 1096, 1097, 1098.

⑨ *A. S. C.,* 1094.

⑩ O. V., IV, pp. 278-85 ; *A. S. C.,* 1095 ; Barlow, *William Rufus,* pp. 347f.

⑪ O. V., V, pp. 212ff. ; Suger, *Vie de Louis VI le Gros,* ed. H. Waquet (Paris, 1964) (Suger と略記), pp. 4-11. ; Barlow, *William Rufus,* pp. 378f., 393.

⑫ *A. S. C.,* 1097 ; Barlow, *William Rufus,* pp. 370f. ; J. E. Lloyd, *A History of Wales,* 2 vols. (London, 1911) II, p. 408.

⑬ O. V., V., pp. 298-9. ヒューのくンリの証書への副署は以下にみられる。*R. R. A. N.,* II, nos. 492, 497, 510, 532, 533.

⑭ O. V., V, pp. 314-5 ; Eadmer, *Historia Novorum,* ed. M. Rule (R. S., 1884) (*H. N.* と略記), pp. 28-30 ; J. Tait ed., *The Chartulary or Register of the Abbey of St. Werburgh Chester, Chetham Society,new ser.* 79 (1920), 82 (1923) 2 parts (*St. Werburgh* と略記), I, pp. xxiv-v.

二　ヒューの政治的関心とその行動

二・一　ウェールズ

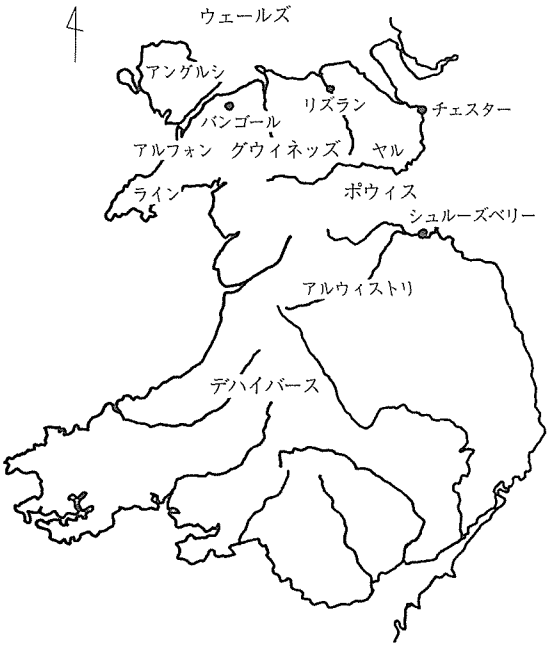
チェシャーを与えられたヒューは、境界を接するウェールズにどのように対応したのだろうか。その背後にアイルランド、そしてスカンディナビアとの関係を控え、ウェールズ境界はイングランド支配層にとってまさに辺境防衛の臨界点であった。[1] この領域で争乱が頻発していたことが記録に残り、ノルマン側が絶えず対応を迫られていたことがわかる。[2] オルデリクスは、「常にイングランド人とウェールズ人に悩まされていた」ゲルボッドが大陸に去った直後、あとをついでチェスター伯に任じられたヒューが、ロバート・オブ・リズランやロバート・オブ・マルパスら、その後ヒューとともにウェールズ辺境支配に乗り出す彼の有力家臣たちとともにチェシャーに所領を得たとのべる。[3] ウィリアム征服王が反乱を押さえ、チェスターに築城した直後のこの時点では、チェシャーは未だノルマン勢力によって制圧されきってはいなかった。都市チェスターは、ウェールズやアイルランドに向けての軍事的基地となるのみならず、商業的にも宗教的にもマーシア伯領における重要な中心地であった。[4] このチェシャーを押さえ、ウェールズに対応することがヒューの役割となったのである。

ノルマン・コンクエストの時期、ウェールズ内部も混乱した状況にあった。有力君主グリフィズ・アプ・ルウェリンが一〇六三年に殺され、強力な権力を欠いたウェールズは相互に争いを繰り返すことになる。[5] さらにノルマン人の侵入にともなう混乱は、ウェールズ側と辺境領域のイングランド人とを協力させる契機となった。[6] ウェールズ側にもノルマン勢力が頻繁に侵入した記録が残されている。[7] また、ウェールズ辺境に大所領を設け、ヘリフォード伯ウィリアム・フィッツオズバーン、シュルーズベリー伯ロジャー・ド・モンゴメリー、そしてヒューという有力家臣たちを配置することにより反乱に対応させるのが征服王の政策であり、[8] この「侵入」は王ではなく彼らの主導により行われたことがわかる。実際、征

服王自身の遠征の記録は八一年の一回を除いてみあたらない。ヒューと同じ頃、一〇七一年あるいはそれ以前にロジャーはシュルーズベリー伯となり、[9] ウィリアム・フィッツオズバーンは一〇六七年にヘリフォード伯となっていた。[10] 彼らからすれば、この状況は、ウェールズ辺境領域、あるいはその内部にまで勢力を伸張させてゆく格好の機会を提供するものであった。[11] 北ウェールズ戦役は主にヒューとロバート・オブ・リズラン、そしてシュルーズベリー伯ロジャーにより率いられることになった。

前述のように、ヒューは一〇六〇年代末からのウェールズを巻き込んだ反乱を制圧する戦役に関わっていた。[12] 征服王は、このときスコットランドのマルコム三世と争っており、ヒューたちノルマン貴族が直接ウェールズ側に対処する。この七〇年代に、ヒューとロバート・オブ・リズランの勢力が北部ウェールズ内部にかなり浸透していったことがたどれる。特に一〇七五年には北ウェールズ内の勢力関係が変化し、彼らの勢力浸透はこの状況の変化を逃さなかった。まず、有力ウェールズ君主たち、北ウェールズのグウィネッズの君主の血筋をひくグリフィズ・アプ・カナンとトレハーン・アプ・カラドグ間でグアイト・エルの戦い、ブロン・イル・エルの戦いが行われた。グリフィズ・アプ・カナンはトレハーンから北ウェールズのグウィネッズを取り返そうとしたのである。この北ウェールズでの争乱は、ロバート・オブ・リズランに介入の機会を与えることになった。[13] 史料は、グリフィズがロバートに援助を求め、テガイングルから援軍がやってきた、と述べており、[14] ロバートがリズラン城のあるテガイングルにおいて既に勢力を確立していたことがわかるのである。リズランの地はグリフィズ・アプ・ルウェリン時代の重要な砦であった。[15] さらに、ここにヒューではなくロバートの名が見られることから、彼が一〇七五年の時点で、ある程度独立的にウェールズ進出への主導権を行使していたことがわかる。七五年戦役の結果はトレハーンの勝利に終わり、彼はグウィネッズを維持し「グウィネッズの王」となった。[16]

次の段階でノルマン勢力と北ウェールズ勢力の関係はさらなる展開をみせる。一〇八〇年には、ヒューはノルマン勢とともに、ポウィスのウェールズ軍を率いて北部ウェールズの奥地、ラインまで侵入する大遠征を率いている。[17] よって、七



○年代後半にポウィスはすでにヒューの勢力下に組み入れられていたことがわかる。八一年、ミニズ・カーンの戦いでグリフィズ・アプ・カナンはデハイバースのリース・アプ・テウドルとともに、トレハーン・アプ・カラドグ側と戦ったが、この時はグリフィズの勝利に終わり、彼がグウィネッズを支配することになった。[18] つまり、グリフィズがノルマン人たちと直接対応することになったのである。彼はしかし、ノルマン人たちに捕らわれ、ヒューはロバート・オブ・リズランとともにグウィネッズとポウィスにさらに築城した。[19] 八一年にはウィリアム征服王がウェールズに侵攻（ウェールズ側の記録では巡礼）した。[20] ミニズ・カーンの戦いとこの遠征の直接の関係は不明だが、ノルマン勢力がウェールズ内部の混乱を好機として侵入をある程度完成したことが確認できる。

ヒューとその家臣達の北ウェールズへの進出は、ドゥームズデイ・ブックからも確認することができる。一〇八六年のドゥームズデイ調査の時点で、境界領域のハンドレッドでウェールズ内とされたものは、ほとんどヒュー、あるいはその家臣が保有していた。そして、ここでもヒューとともにロバート・オブ・リズランが主要な所領保有者となっているのがわかる。ヒューの直領地とロバート・オブ・リズランがヒューから保有している所領は沿岸沿いの要地に位置しており、内陸の所領は他の家臣たちに下封されている。[21] ヒューはウェールズの内部に築城し、また、シュルーズベリー伯ロジャーからヤルを保有していた。[22] リズランの城はヒューとロバートの二人で保有していたが、ロ

バートはより奥地のディガンウィに築城している。[23] ロバート・オブ・リズランがウェールズ内部に進出していたことは、彼がグウィネッズを王から直接保有していると記録されていること、またシュルーズベリー伯ロジャーが保有していたアルウィストリも、北ウェールズ、すなわちグウィネッズに所属するとしてその保有を要求したことからも確認できる。[24] このことはロバートが自身をグウィネッズの領主とみなしていたことも示しているだろう。征服王の治世後半にはヒュー、そしてロバート・オブ・リズランはグウィネッズを支配し、ポウィスにまで勢力をのばしていたことがわかる。

一〇八一年以降、ウェールズは比較的安定していたが、ルーフスの時代に状況は変化する。八八年のルーフスに対する反乱はウェールズ勢力を巻き込み、ヘリフォードとシュロップシャーの勢力をともなって反乱側がウスターシャーを荒らした。[25] また、オルデリクスは八八年反乱においてロバート・オブ・リズランがロチェスタの包囲に参加している間、グリフィズ・アプ・カナンがリズランに攻め込んだと述べている。[26] だがこの八八年のウェールズ反乱は、ノルマン勢力のウェールズへの浸透の方向を変えることはなく、九二年には、バンゴールにノルマン人司教が配置されているのである。

一〇九三年から九八年、ウェールズ側の叙述史料はノルマン勢力のウェールズ内へのさらなる侵攻を記録している。[27] 九三年、ロバート・オブ・リズランがウェールズ側に殺害され、[28] ヒューがロバートの所領を継承した。[29] 九四年、ヒューがノルマンディーにいた間、ウェールズは大規模にノルマン勢力を攻撃し、チェスター、シュルーズベリー、ヘリフォードを襲った。[30] これに対し、シュルーズベリー伯を継いだロジャーの息子ヒューがウェールズ側と交戦する。[31] 九五年には、ルーフスがウェールズに遠征するが、これは多くの人馬を失ったのみに終わっており、九七年の遠征もさっぱり成果はなかったと史料は冷たく述べている。[32]

一方、ヒューは一〇九八年、シュルーズベリー伯ヒューとともにグウィネッズに大規模な遠征を仕掛けた。[33] シュルーズベリー伯ヒューの死にもかかわらず、この遠征は一定の成果をあげる。ウェールズ側の君主たち、つまり、オウェイン・アプ・エドウィンはヒューに奉仕する契約に従い、[34] また、カドゥガン・アプ・ブレディンとグリフィズ・アプ・カナンは

ノルマン側から所領を授けられるという形で最終的に和を結んだのである。[35]

以上から、ヒューのウェールズ政策の特徴がいくつか確認できる。まず、征服王の時代、ウェールズに対しては王ではなく、チェスター伯ヒュー、ロバート・オブ・リズランが独自に対応した。当時のウェールズは分裂状態にあり、[36]ノルマン貴族たちは個々のウェールズ人君主たちと戦い、彼らの争いを利用しながら内部まで進出していった。ルーフスは、父征服王と異なり、自ら軍を率いてウェールズに進軍するが、[37]成果はなく、自身の勢力をウェールズに浸透させることはできなかった。だがこの間、ウェールズとの軋轢によりノルマン貴族側の防衛努力が必要となる一方、混乱に乗じてノルマン側がウェールズ内部に浸透してゆく機会をさらに与えることになったともいえる。

ヒューは一〇九四年ウェールズの大規模反乱時にノルマンディーにおり、九七年にヒューはルーフスのヴェクサン遠征に参加する。つまり彼はしばしばチェシャーから離れていることも可能であり、その権威がすでにチェシャーで確立していたことを示している。ロバート・オブ・リズランの存在もある程度ヒューの不在を補っていたであろう。九二年のヒューのセント・ウェルバラ修道院の建立に際し、ヒューの家臣たちが多く寄進しているが、そのなかにはウェールズの所領も含まれていたのである。[38]よって、ヒューは、チェシャーを安定させたのちも、それを基盤として常にウェールズへの進出の志向を持ち続け、勢力拡大の機会を追求していったことがわかる。[39]

① ウェルシュ・マーチとノルマン人の定住については、J. G. Edwards, 'The Normans and the Welsh March', *Proceedings of the British Academy*, 42 (1956), pp. 155-77 ; D. Walker, 'The Norman Settlement in Wales', *Anglo-Norman Studies*, 1 (1978), pp. 131-43, notes pp. 222-5. ; R. R. Davies, *Domination and Conquest The experience of Ireland, Scotland and Wales, 1100-1300* (Cambridge, 1990) など。ウェールズ境界領域の不安定性については R. Davies, 'Frontier Arrangements in Fragmented Societies : Ireland and Wales', in R. Bartlett, A. MacKay ed., *Medieval Frontier Societies* (Oxford, 1989), pp. 77-100 ; id., 'Kings, Lords and Liberties in the March of Wales, 1066-1272', *T. R. H. S.*, 5th ser. 29 (1979), pp. 41-61. など。

② 例えば、O. V., II, pp. 228-9, 234-7 ; *A. S. C*, 1067 ; Florence of Worcester, *Chronicon ex Chronicis*, ed. B. Thorpe, 2 vols. (London, 1848, 1849) (F. W. と略記), II, pp. 1-2 (1067).

③ O. V., II, pp. 260-3, IV, pp. 138-9.

④ N. J. Higham, *The Origins of Cheshire* (Manchester, 1993), pp.

115f.

⑮ *Brut y Tywysogyon or The Chronicle of the Princes,* ed. tr. T. Jones (Cardiff, 1952), (*Brut* と略記) (1061-1063); *Brenhinedd,* (1061-1063); 当時のウェールズの状況については、R. R. Davies, *The Age of Conquest Wales 1063-1415* (Oxford, 1987, pbk. 1991), pp. 24-7.

⑯ このエドウィンとモーカーの反乱にボウイズのブレディンらウェールズ側が参加した (O. V., II, pp. 214-8)。エドリックを中心にチェスターの人々とウェールズ勢力がシュルーズベリーを包囲したのもこのころであった (O. V., II, pp. 228-9; *A. S. C.,* 1067 (1068))。

⑰ *Brut,* (1070-1072) ~ (1072-1074); *Brenhinedd,* (1070-1072) ~ (1072-1074); *Annales Cambriae,* ed. J. W. ab Ithel (R. S., 1860), 1068, 1071, 1072.

⑱ O. V., II, pp. 260-3.

⑲ J. F. A. Mason, 'Roger de Montgomery and his sons (1067-1102)', *T. R. H. S.,* 5th ser., 13 (1963), pp. 1-28, p. 4; Lewis, 'The Early Earls of Norman England', p. 220.

⑳ O. V., II, pp. 260-1; J. Le Patourel, 'Norman Barons', in id., *Feudal Empires,* IV, pp. 5-9; W. E. Wightman, 'The Palatine Earldom of William FitzOsbern in Gloucestershire and Worcestershire (1066-1071)', *E. H. R.,* 77 (1962), pp. 6-17.

㉑ J. Le Patourel, 'The Norman colonization of Britain after 1066', in *I Normanni e la loro espansione in Europa nell'alto medioevo, Settimane di studio del centro italiano di studi sull'alto medioevo,* 16 (Spoleto, 1969), pp. 409-38, pp. 425-7.

㉒ O. V., II, pp. 234-7.

㉓ *History of G. ap. C.,* pp. 118-9; *Brut,* (1073-75); *Brenhinedd,* (1073-75); *Annales Cambriae,* 1073.

㉔ *History of G. ap. C.,* pp. 112-4.

㉕ Lloyd, *A History of Wales,* II, p. 382.

㉖ *Brut,* (1074-76)~(1077-79).

㉗ *History of G. ap C.,* pp. 122-4.「グリフィズ・アプ・カナンの歴史」はグリフィズがアロン・イル・エルの敗戦のあとダウィネンズを奪回し、その直後テーン人に誘拐されたとする。ヒューの遠征はおそらくグリフィズがとらわれていた間に行われたと考えられる。

㉘ *History of G. ap C.,* pp. 124-30; *Brenhinedd,* (1079-81); *Brut,* (1079-81); *Annales Cambriae,* 1079 (1081 ?); Lloyd, *A History of Wales,* II, pp. 384f.

㉙ 城をアンクルシ、アルフォン、バンゴール、アイリオニズに建てたと記録する (*History of G. ap C.,* pp. 130-2)。A. D. Carr, *Medieval Wales* (London, 1995), p. 33; Lloyd, *A History of Wales,* II, p. 385. ヒューがグリフィズをいつ捕らえたかは不明だが、ミニズ・カーンの戦いの直後と考えられている (*History of G. ap C.* p. 63.)。

㉚ *A. S. C.,* 1081; Henry, Archdeacon of Huntingdon, *Historia Anglorum,* ed. tr. D. Greenway (Oxford, 1996) (H. H. と略記), pp. 400-1; *Brut, Brenhinedd,* (1079-81).

㉛ J. Morris ed., *Domesday Book,* 38 vols. (Chichester, 1970-1992), Cheshire.

㉜ *Domesday Book,* Shropshire 4, 2/1.

㉝ O. V., IV, pp. 138-9.

㉞ *Domesday Book,* Cheshire FT3 G.

㉟ *A. S. C.,* 1088; H.H., pp. 412-3; William of Malmesbury, *De Gestis*

Anglorum libri quinque, historiae novellae libri tres, ed. W. Stubbs, 2 vols. (R. S., 1887-9) (*G. R.* と略記), II, p. 361 ; F. W., II, pp. 24-6 (1088).

㉘ O. V., IV, pp. 134-7. ウェールズ内の不安定さも影響した。八八年、デハイバースのリース・アプ・テウドルとポウイスのアレディンの子供たちとの争いも起こっている。リースは勝利し、ポウイスに進出したため、ヒューやロバートの勢力と対応することになった (*Brut,* (1086-88) ; *Brenhinedd,* 1088 ; *Annales Cambriae,* 1087 ; Lloyd, *A History of Wales,* II, p. 398)。

㉙ *Brut,* (1091-93)～(1096-98) ; *Brenhinedd,* (1091-93)～(1096-98) ; *Annales Cambriae,* 1091 (1093), 1092 (1094), 1096, 1097 ; *A. S. C,* 1094～1098 ; F. W., II, pp. 35 (1094), 39 (1095), 40 (1097), 41-2 (1098) ; Symeon of Durham, *Opera Omnia,* ed. T. Arnold, 2 vols. (R. S., 1882-5) (S. D. と略記) II, pp. 224, 226.

㉚ ロバートについては、O. V., IV, pp. 134-47. その殺害の年代確定については、O. V., IV, pp. xxxiv-xxxviii.

㉛ Gaimar, line 6043 ; Lloyd, *A History of Wales,* II, pp. 391f. ; 一〇九三年頃のヒューによるセント・ウェルバラ修道院への寄進地には一〇八六年の時点でロバートが保有していた所領が含まれている (O. V., IV, p. xxxvii)。

㉜ *A. S. C.,* 1094 ; F. W., II, p. 35 (1094) ; *History of G. ap C.,* pp. 136-40, p. 174 n.

㉝ *A. S. C.,* 1094.

㉞ *A. S. C.,* 1095, 1097.

㉟ O. V., V, pp. 222-5. *G. R.,* II, pp. 318, 376 ; *Brut, Brenhinedd,* (1096-98), ; *Annales Cambriae,* 1098 ; F. W., II, pp. 41-2 (1098) ; *A. S. C.,* 1098 ; S. D., II, p. 228.

㊱ O. V., IV, p. 145 n. 6 ; Lloyd, *A History of Wales,* II, p. 408. オウェインは一〇九八年にウェールズ側に対し、ノルマン側の軍を率いていた (*Brut, Brenhinedd* (1096-98))。

㊲ *Brut, Brenhinedd,* (1096-98, 1097-99) ; *Annales Cambriae,* 1098, 1099.

㊳ Davis, *The Age of Conquest,* pp. 3-23.

㊴ *A. S. C.,* 1095, 1097 ; *Brut, Brenhinedd,* (1093-95, 1095-97) ; *Annales Cambriae,* 1092, 1097 ; F. W., II. pp. 35 (1094), 39 (1095), 40-1 (1097) ; H.H., pp. 420-1, 444-5, S. D., II, pp. 224, 226, 228.

㊵ *C. E. C.,* no. 3 ; *St. Werburgh,* no. 2.

㊶ また、ルイスはグリフィズ・アプ・カナンの時代に、北ウェールズの形成がノルマン貴族たちの介入によって大きく影響されていたことを指摘している。C. P. Lewis, 'Gruffudd ap Cynan and the Normans', in K. L. Maund ed., *Gruffudd ap Cynan : a collaborative biography* (Woodbridge, 1996), pp. 61-77.

二・二　ヒューと征服王の息子たち

一〇八七年の征服王の死ののち、二人の年長の息子たちであるロベール・クルトウーズ、ウィリアム・ルーフスが、そ

れぞれノルマンディーとイングランドを相続し、遺産のみ相続した末子のヘンリも加わり、互いに争いを繰り返すことになった。本節では、ヒューが主君たちの争乱にどのように関わったかを検討する。

一〇八八年のルーフスのイングランド王位継承に対する大反乱、九五年の陰謀はともに成功することはなく、ルーフスは反乱者たちを処分した。[1] 双方の反乱のヒューとの関連で興味深い点は、多くの有力貴族たちが、征服王の長男であり、ノルマンディー公であるロベール・クルトゥーズを支持して反乱したのに対し、ヒューはそれに参加しなかったことである。八八年反乱ではロバート・オブ・リズランが反乱側に参加していたとされ、[2] また一〇九五年においては、彼の妹の夫であるウィリアム・オブ・ユーが反乱側に加担しているにもかかわらず、オルデリクスはルーフスの支持者として彼の名をあげる。[3] また、ルーフスの証書への登場の多さ、そしてルーフスにより所領を与えられていることからも彼がルーフスを支持していたことがわかる。[4] さらにルーフスの死後、イングランド王となった弟ヘンリは、兄ロベールと争うことになるが、ヒューはここでも最終的にイングランドを維持するヘンリを支持していたのである。[5]

一〇八八年の大反乱はバイユー司教オドの主導によるものであり、これはモルタン伯ロバート、クタンス司教ジョフロワなどの征服世代の有力貴族たちを多く巻き込んでいた。ヒューはかつてオドを支持していたとの史料があり、[6] ここから彼のオドへの支持は転換したと考えられるだろう。ノルマンディーでゴツ家とつながりを持っていたオドは、[7] とくにヒューがノルマンディーの所領を継承した直後は、征服王の側近としての有力さから支持する対象として十分な魅力をもっていたであろうが、すでに王による逮捕で没落の危機を経験していた。一方、イングランドではヒューとオドの所領保有関係はみられず、さらにチェスター伯領という大規模な所領が、彼の名を成し、今や確立した権力基盤として重要であったことが、イングランド王ルーフスを支持した理由として考えられる。加えてウェールズ辺境は、いまだ実力によるさらなる所領拡大の可能性を期待させていた。同じくウェールズ辺境に所領をもつシュルーズベリー伯ロジャーにも同様の可能性が示唆できる。彼ははじめは反乱側に組したが、すぐに脱落したというのである。[8]

以上からは、ヒューがチェシャーを中心とした彼のイングランドの所領に中心をおいていた、その意味ではイングランド貴族であったと結論されるかもしれない。しかし、ヒューはアヴランシュ副伯であり、他の有力ノルマン貴族と同様ノルマンディーにおいて所領をもっていたことは、どのような影響をもたらしていたのか考察しなければならない。また、彼は征服王の時代しばしば、そしてルーフスがノルマンディーを押さえてからも、ノルマンディーにおいて開催された王＝公の集会に出席していると考えられる。[9] また、前述のように彼がノルマンディーで活躍した記録もみられる。では、ヒューのノルマンディーとのかかわりを具体的にたどってみよう。

まず注目しなければならないのは、ヒューのノルマンディーにおける所領の中心が、ヘンリが兄ロベールから保有していた西部地域にあったことである。[10] よって、彼はノルマンディーの彼の所領を安全に保持するためにヘンリの動向を考慮しなければならなかったであろう。さらにロベール・ド・トリニは、ヘンリはロベールが十字軍に出発した後、ルーフスの承諾をえてバイユーも手に入れた、[11] としており、ヒューのベッサン地域の所領もヘンリの影響を受けることとなったことがうかがわれる。

では、ヘンリとヒューの関係はどのようなものだったのだろうか。ロベール・ド・トリニは彼らの近しい関係を指摘している。[12] 兄ロベールはヘンリに西部ノルマンディーの所領を与えることで、ルーフスを攻めるための資金を得ており、[13] またヘンリは八八年反乱時にはノルマンディーにいたと考えられるが、[14] このことはヘンリがロベールを支持していたことを必ずしも意味しない。ヘンリは、まず所領的基盤を得て自立することをめざし、兄たちとの関係はその目的に規定されていた。ロベールは、ヘンリがイングランドに渡ってルーフスに援助を求めたことに怒って彼を投獄し、八九年に解放する。[15] 九一年には、ルーフスとロベールとの間に和平が成立した時、ヘンリは支持者を集めて兄たちに敵対し、クタンスとアヴランシュにたてこもる。さらに、オルデリクスは、ヘンリがコタンタンとアヴランサンを統治して兄たちに対抗し、ヒューがこれを支持したという叙述のなかで、「ルーフスをおそれるあまり、ヒューでさえヘンリを見捨てた」と述べるこ

とによって、ヘンリに忠実なヒューさえもがルーフス側に妥協しなければならなかったという困難な状況を描写した。[16]このときルーフスとロベールは、ヘンリをモン・サン・ミシェルに包囲した。[17]結果として、ヘンリはノルマンディーを脱出せざるを得なかったが、一〇九二年にはドンフロンを獲得する。[18]この時点でルーフスとロベールは再び敵対状態にはいっていたのである。ヘンリは、この地の有力貴族であるロベール・ド・ベレームに対抗してドンフロンを維持する努力を続けなければならなかったが、この困難な状況において、彼が貴族たちの助力を必要としていたことは容易に推測できる。ロベール・ド・トリニは、ヒューがヘンリに忠実であり続けたため、サン・ジャム・ド・ブヴロンを得たと述べており、彼が以前からヘンリを支持し続けていたことがわかるのである。[19]よって、ヒューとヘンリが西部ノルマンディーにおいて彼らの勢力を維持拡大するために、協力関係を保っていたことが理解されよう。

結局、ヒューの目的は、イングランドと西部ノルマンディーの所領を維持するために、できるだけルーフスとヘンリのどちらとも良好な関係を保っておくことであったといえる。九一年、ヒューはルーフスとともにノルマンディーへ向かって海を渡っている。[20]八九年以降、ルーフスはノルマン貴族たちの支持を得ながら、ノルマンディーそのに権威を広めつつあった。ヒューは注意深く情勢を見渡し、君主との関係を模索していたであろう。ヒューはヘンリと良好な関係を保ってはいたが、それはヘンリが一〇九二年頃にコタンタン地方における自身の勢力を確立し、ルーフスと和平を結んでからようやく真に確実なものとなったのではないだろうか。

九二年頃のヘンリとルーフスとの和平の後、ヘンリは兄ロベールの宮廷に出席することを最終的にやめ、[21]ルーフスとの合意のうえにコタンタンとベッサンに基盤を確立した。[22]ヒューは九四年、ルーフスの命によりヘンリに同行している。[23]ルーフスによる九七～九八年の対仏遠征にもヒューはヘンリとともに参加した。[24]一方、九五年にヘンリはルーフスの命でノルマンディーでロベールと戦っている。[25]このように、ルーフスとヘンリの友好関係によってヒューの立場はようやく安全なものとなり、双方に仕えることが可能となっていった。ヒューがルーフスの治世において有力貴族であり続け、そし

てヘンリとの良好な関係を維持していたことを考えれば、一一〇〇年、ルーフスの死に際して彼がためらいなくヘンリを支持したことは当然の選択であった。[26]

ルーフス、ヘンリと異なり、ノルマンディー公ロベールはヒューの支持を得たことはなかった。ロベールが一〇七七年に征服王に対し反乱したとき、ヒューは王を支持する。彼は、ロベールの証書に副署せず、彼がロベールを支持したと述べる史料はみあたらない。かつてヒューが支持したといわれたオドは常にロベールの支持者であったが、彼の存在は、ロベールとヒューの関係に影響したのだろうか。直接答えてくれる史料はなく、ヒューがルーフスやヘンリを支持していた間に、彼のベッサンの所領が影響をうけたかは不明である。しかし、九六年、ロベールがノルマンディーをルーフスにまかせ、オドと第一回十字軍に参加してしまい、ヘンリがベッサンをルーフスの承諾のもとに支配することになったという事情にてらせば、その時点でヒューの所領の保全は約束されたのではないだろうか。九〇年代はじめには、ルーフスとヘンリはすでにノルマンディーにその勢力を拡大しつつあった。ヒューは彼らに忠実であることを選択したのである。

以上から、一面では、ヒューは自身のチェシャーを中心とした大規模所領を管理すること、そしてウェールズへの拡大を志向したために、イングランド王となったルーフスとの関係を重視していたと言える。しかしそれに加え、ノルマンディーに基盤をもつヘンリが自立し勢力を伸長させてゆくにつれ、彼との関係が重要になっていったと考えられる。一〇八七年のイングランドとノルマンディーの分裂後、ヒューはイングランド王ルーフスを支持したが、それはノルマンディーの自己の勢力をいかに維持するかの可能性を放棄したものではなかった。クロス・チャネルであった彼の直接の目標は、「イングランドとノルマンディーの統一」という王国レベルの動機ではなく、自身の所領を維持し拡大することであった。君主たろうとする征服王の息子たちのなか、そのもとで最も彼自身の所領を維持拡大できるかを考慮して誰を支持するか、つまりウィリアム・ルーフスとヘンリを選択したのである。

㉖ 1088: O. V., IV, pp. 120-35; *A. S. C.*, 1088; *G. R.*, II, pp. 360-3; F. W., II, pp. 21-6 (1088); H. H., pp. 412-5; *G. N. D.*, II, pp. 204-5.

1095 : O. V., IV, pp. 278-85 ; *A. S. C.,* 1095 ; F. W., II, pp. 38-9 (1095) ; *G. N.D.,* II, pp. 214-5 ; H. H., pp. 420-1 ; *G. R.,* II, p. 372. 〃〃の反乱については、Barlow, *William Rufus,* pp. 70-84, 346-59. 処分については、Hollister, 'Magnates and "Curiales" in Early Norman England', pp. 97-116.

② O. V., IV, pp. 124-5. A. Wareham, 'The Motives and Politics of the Bigod Family, c. 1066-1177', *Anglo-Norman Studies,* 17 (1995), pp. 223-42, pp. 226f. はロバートとヒューの所領争いが両者を争乱の別々の側の支持に向かわせたとする。

③ O. V., IV, pp. 128-9, pp. 284-5. オルデリクスはヒューがウィリアム・オブ・ユーの厳しい処罰を要求したと述べているが、これは親族関係にもとづくヒューくの疑いを封じる意味も考えられる。

④ W. Farrer, *Honors and Knights' Fees,* 3 vols. (Manchester, 1925), II, p. 6.

⑤ O. V., V, pp. 298-9.

⑥ オドは一〇八二年に征服王により突然逮捕され、王の死まで投獄されている。これについてオルデリクスはオドが教皇位をめざして運動しており、ヒューが彼を支持していたと述べる。O. V., IV, pp. 40-1 ; D. Bates, 'The Character and Career of Odo, bishop of Bayeux (1049/50-1097)', *Speculum,* 50 (1975), pp. 1-20, p. 15.

⑦ コッ家はオドの司教区であるベッサン地域にいくらかの所領を有していた (L. Musset, 'Actes inédits du XIe siècle I: Les plus anciennes chartes du prieuré de Saint-Gabriel (Calvados)', *Bulletin de la Société des Antuquaires de Normandie* (*B. S. A. N.* と略記) pp. 129f. ; H. Navel, 'L'enquête de 1133 sur les fiefs de l'évêché de Bayeux', *B. S. A. N.,* 12 (1935), pp. 5-81, p. 17. ; *Red Book of the Exchequer,* II (R. S., 1896), p. 645 ; L. Musset, 'Les origines et le patrimonie de l'abbaye de Saint-Sever', in *La Normandie bénédictine au temps de Guillaume le Conquérant* (*XIe siècle),* ed. J. Daoust (Lille, 1967), pp. 357-67, pp. 361ff ; R. N. Sauvage ed., *L'abbaye Saint-Martin de Troarn au diocèse de Bayeux des origined au seizième siècle, Mèmoires de la Société des Antiquaires de Normandie,* 34 (Caen, 1911) pp. 350, 356, 362. さらに、オドから所領を保有していたバイユー副伯ラスルフはヒューの姉妹マーガレットと結婚している。

⑧ *G. R.,* II, p. 361 ; K. Thompson, 'Robert of Bellême Reconsidered', *Anglo-Norman Studies,* 13 (1991), pp. 263-86, pp. 268-9.

⑨ *R. R. A. N.,* II, no. 317a. ベローはこれがノルマンディーで承認されたとしている (Barlow, *William Rufus,* p. 278, n. 68)。

⑩ O. V., IV, pp. 120-1, 220-1.

⑪ *G. N. D.,* II, pp. 210-3.

⑫ *G. N. D.,* II, pp. 208-9.

⑬ O. V., IV, pp. 118-21.

⑭ O. V., IV, pp. 148-9 ; Barlow, *William Rufus,* pp. 69f.

⑮ O. V., IV, pp. 164-5.

⑯ O. V., IV, pp. 250-1.

⑰ くハリがモハ・サハ・〃ハエルにおいて包囲されたりとについては、F. W., II, p. 27 (1091) ; *G. N. D.,* II, pp. 206-7 ; *G. R.,* II, pp. 469-70.

⑱ O. V., IV, pp. 256-9.

⑲ *G. N. D.,* II, pp. 208-9. サハ・シャム・ド・ブロハはブルターニュとの境界にある重要な要塞である (J. Yver, 'Les châteaux forts en Normandie jusqu'au milieu du XIIe siècle., *B. S. A. N.,* 53 (1957, 1955-56), pp. 28-115, 604-9, pp. 58-9)。

⑳ *R. R. A. N.*, II, 317a.
㉑ ヘンリは一〇九一年以降のロベールの証書に登場していない。
㉒ *G. N. D.*, II, pp. 210-3.
㉓ *A. S. C.*, 1094.
㉔ O. V., V, pp. 214-5.
㉕ *A. S. C.*, 1095.
㉖ O. V., V, pp. 298-9. J. Le Patourel, 'Henri Beauclerc, Comte du Cotentin, 1088', *Revue Historique de droit français et étranger*, 4e ser. 53 (1975), pp. 167-8 は、ヘンリが王位を得るまでの経歴の重要性を指摘している。

二・三　修道院の建立

最後に、ヒューの意識の一つの現れともいえる、彼の修道院建立について考えてみよう。貴族による修道院の建立の意味とその影響は様々に分析されるが、なかでも、その貴族のその土地への定着、そして勢力進出の意味をもっていたことが指摘されている。[1] ヒューの場合、彼の修道院の建立としては、アヴランシュ近郊のサン・スヴェール修道院、チェスターのセント・ウェルバラ修道院が知られている。ではこれらは彼にとってどのような意味をもっていたのだろうか。

サン・スヴェール修道院の建立時期については、一〇八五年とするもの、または一〇七〇年あるいはそれ以前とする見解にわかれている。つまり、ロベール・ド・トリニによる'Hugo vero, postea comes Cestrensis'という文から、サン・スヴェール修道院建立時にはヒューはまだチェスター伯になっていなかったと理解するのである。[2] しかし、'Hugo vicecomes Abrincatensis, postea vero comes Cestrensis'[3]、あるいは'Hugo de Abrincis vicecomes Abrincatensis, qui postea fuit comes Cestrensis, fecit abbatiam S. Severi, Guillelmo Gemeticensi auctore anno circiter 1085'[4]という記述と、彼がチェスター伯となってから約一〇年後にようやく副伯となった点を考慮すれば、サン・スヴェールの建立がチェスター伯となる前であったという論は妥当ではないだろう。さらに、彼の同修道院への寄進地のなかに豊富にアヴランサン地域の所領が含まれていることから、これは彼が父リシャールを継承してから成されたと考えるべきであろう。

一〇八五年は、征服王がアングロ＝ノルマン王国全体を維持しており、ヒューがアヴランシュ副伯となってようやく数

年後である。このサン・スヴェールがヒューの最初の修道院建立であるが、彼は信仰心の拠り所としてと同時に、彼が継承した父の所領とそこにおける勢力の保全のアピールとして修道院の建立を思い立ったのではないだろうか。彼が副伯となったアヴランシュのそばを選択したことも上述の理由を裏付けよう。その豊富な寄進地はノルマンディー西部の彼の所領を示し、またそこにはイングランド、リンカンシャーの所領も含まれていたのである。[5]

一方、彼のチェスターのセント・ウェルバラ修道院の建立は、アンセルムスの援助を得て一〇九二年に成された。[6]その経過をしるしたエドマーの記述はいささか誇張がすぎるが、少なくともアンセルムスの名声がこの修道院の権威を高めることに役だったことは確かである。病を得たのちにヒューが修道士となり、埋葬されたのはまさにこのセント・ウェルバラ修道院であり、ヒューの家臣たちも気前よく寄進をかさね、また後世のチェスター伯たちも同修道院との関係を保ち続けた。

この、イングランドとノルマンディーにおける二つの修道院建立は、シュルーズベリー伯ロジャー・ド・モンゴメリーと比較することができる。ロジャーは一〇八三年にシュルーズベリーに修道院を建立し、そこに埋葬された。[7]チブナルは、このイングランドにおける修道院寄進はその家系の社会的有力さを示し、そしてこの領域にすでに基盤をおろしていたことを示しているとする。[8]ヒューのセント・ウェルバラ修道院建立も同様の解釈ができるだろう。イエモワ副伯であるモンゴメリー家がすでに、セ、トローン、アルマネシュに修道院を建立していたことも、ヒューを刺激したと思われる。サン・スヴェール、セント・ウェルバラ両修道院建立により、彼もロジャーと同様に、伯あるいは副伯の地域に、複数の修道院を建立したことになった。ヒューはこれらの修道院建立を通じ、基盤確立の一つの道標としたのではないだろうか。

① M. Chibnall, 'Ecclesiastical Patoronage and the Growth of Feudal Estates at the Time of the Norman Conquest', *Annales de Normandie*, 8 (1958), pp. 103-18 ; C. Potts, *Monastic Revival and Regional Identity in Early Normandy* (Woodbridge, 1997).

② *G. N. D.*, II, p. 134. 例えば、Musset, 'Saint-Sever', p. 360 ; Hollister, 'Greater Domesday Tenants-in-Chief', p. 244 ; Lewis,

'Formation', p. 54.

③ *Recueil des historiens des Gaules et de la France*, ed. M. Bouquet et al., 24 vols. (Paris, 1876-1904), t. XIV, p. 387 a.

④ *Gallia Christiana*, XI, 913, D.

⑤ Musset, 'Saint-Sever', pp. 357-67.

⑥ *H. N*, pp. 27-9; O. V., IV, p. 176 n. 2; Barlow, *William Rufus*, p. 302; S. Vaughn, *Anselm of Bec and Robert of Meulan* (Berkeley and Los Angels, 1987), pp. 123-5.

⑦ *The Cartulary of Shrewsbury Abbey*, ed. U. Rees, 2 vols, (Aberystwyth, 1975), I, pp. x-xi.

⑧ Chibnall, 'Ecclesiastical Patronage', p. 117.

おわりに

以上、征服後第一世代のアングロ＝ノルマン王国における有力貴族であるチェスター伯ヒューの動向をたどってきた。最後に得られた結論をまとめておこう。一〇七〇年代、ヒューは積極的にウェールズへの拡大をめざし、新たに得たこの所領への定着と拡大に努力した。チェシャーとウェールズ境界にあった彼の所領的関心の中心は、一〇八〇年頃の父リシャールの副伯継承により、西部ノルマンディーのアヴランサン、そしてベッサンに広がり、サン・スヴェール修道院の建立にみられるように、彼がそこでの勢力確立をめざしたことがわかる。征服王の死後は、イングランドの所領を考慮してヒューはルーフスを支持し、西部ノルマンディー所領については、一〇九〇年代初期からヘンリを支持した。ここからは、ウィリアム・ルーフスとヘンリがともにノルマンディーにおいて勢力拡大を進めてゆく過程が、ヒューの行動を規定していったことがわかる。さらに、君主たちとの良好な関係の現れとして、彼の王＝公の宮廷への出席が証書への副署、叙述史料からもうかがわれる。一方、君主たちにとっても、有力貴族であるヒューとの関係は考慮にいれるべき重要性があった。ルーフスは忠誠を確実なものとするために、忠実な家臣たちに気前よく所領を分け与えており①、ヒューも中部イングランドに所領を手に入れた。ヘンリがヒューにサン・ジャム・ド・ブヴロンを与えたことも同様の動機に基づいていただろう。支持すべき君主を選択せねばならない状況になったとき、ヒューはそのもとで自身の所領を維持できそうな人物を

選び、君主たちもその志向を利用していったのである。

このように、アングロ＝ノルマン王国においてクロス・チャネル・バロンであることは、イングランドとノルマンディーの双方に所領をもち、両方の地を行き来しているという事実以上に、君主との関係を保ちつつ、かつ自己の所領地域の利害を考慮することからくる帰結を包含していた。貴族たちにとっては、まず、自己の所領とそこにおける上級領主――それが、イングランド王、あるいはノルマンディー公、あるいはその両方――という関係が直接的な意味をもっていたことに注意しなければならないのである。その主君がイングランド王、あるいはノルマンディー公である以上、イングランドとノルマンディーという領域的枠組みが、必然的に彼らと主従関係をもっている貴族たちの行動に影響してこざるをえないという意味でのみ、「イングランドとノルマンディーの統一を望むクロス・チャネル・バロンたち」ということができるのではないだろうか。

ここで、はじめに述べた問題設定にかえって、ヒューの行動をアングロ＝ノルマン王国のなかに位置づけてみよう。ル＝パトゥーレルは、クロス・チャネル・タイプの貴族たちが多数存在していたことがイングランドとノルマンディーの一体性をつくる基盤となっていたと考えたが、前述したように、さまざまなタイプの貴族たちが存在していたことが指摘されたことで、この見解は修正されている。さらに、本稿でヒューの経歴を検討することによって、クロス・チャネル・バロンと理解されていたヒューが、必ずしも両方の地を常に行き来していたわけではなく、また、イングランドとノルマンディーという枠組みを意識するよりも自己の所領の保全・拡大を目的としていたことが示された。それぞれの地域に対し、イングランド王とノルマンディー公という主君の側には、イングランドとノルマンディーという政治的枠組みの意識が存在し、そして、大陸ノルマンディー出身の貴族たちにとっては、オルデリクスが述べたような「イングランドの豊かな土地とノルマンディーの父祖伝来の土地」[②]という意味での、意識のうえでの領域的枠組みもあったであろう。しかし、アングロ＝ノルマン貴族たちにおいては、それらに加え、なによりも直接的に個々人の所領の利害関心に基づく地域的枠組み

が彼らの行動を重層的に規定していったのである。吉武憲司氏は、総体的にクロス・チャネル・バロンをとらえたうえで、彼らの存在のために一一・一二世紀にイングランド一国的な政治共同体の発展が妨げられていたことを指摘している。[③] 一方、本稿は、チェスター伯ヒュー個人に焦点をあてることによって、個々の利害関心に基づいた地域的枠組みが重層的に存在していたことを、個別の貴族レベルから示すことになった。

本稿ではヒューという一人の人物をとりあげたのみだが、他の有力アングロ＝ノルマン貴族たちの動きを、ノルマンディーとイングランドという枠組みからのみでなく、彼らの個々の利害関心にそって再検討し、そして征服以降の時代の変遷に従って彼らが性格をどのように変化させていったかを理解してはじめて、人的構造からみたアングロ＝ノルマン王国の統合とその実態の変遷を明らかにすることができるだろう。

① J. A. Green, 'William Rufus, Henry I and the Royal Demesne', *History*, 64 (1979), pp. 337-52, p. 343.

② O. V., IV, pp. 122-3.

③ 吉武憲司「アングロ・ノルマン王国と封建諸侯層　一〇六六年―一二〇四年」『西洋史学』、一七七号、一―一六頁、一九九五年。

（京都大学研修員）

Hugh earl of Chester and the Anglo-Norman State

by

NAKAMURA Atsuko

Earl Hugh of Chester is one of the most prominent Anglo-Norman magnates. He has been considered a 'cross-Channel' baron who held large estates both in England and Normandy, and frequently traveled between these two regions. John Le Patourel insisted that these types of barons had constituted a homogeneous aristocracy of the Anglo-Norman State. This 'one homogeneous aristocratic society' has been regarded as one of the fundamental bases for Le Patourel's opinion on assimilation and unity of England and Normandy.

First, this paper hopes to reconstruct the career of Earl Hugh, mainly by using the charter evidence. We will then try to locate his career within the transformation of the Anglo-Norman society under the first generation after the Norman Conquest. We will mainly focus on two aspects of his political behavior: his policy towards Wales and his relationship with the sons of William the Conqueror. This study reveals that the political behavior of Earl Hugh based on his motivation to keep, or to accumulate, his newly acquired estates spreading in the Welsh March area, and his family estates located in mid-western Normandy. Thus, not only the political/ regional structure of England and Normandy but also the situation of the individual magnates consisted multi-leveled regional structure, which affected their political behavior strongly and directly.